説教20210613　エゼキエル書31：1-14　 マルコ4：26-34

「大きくなれ」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今を生きる私たちが一番苦手なことは、計画しないでいるということではないでしょうか。手帳は、人との約束で日程が埋まっていないと、なんか人生が充実していないようで、落ち着かない。先々の計画がそうやって決まっていくことこそ自分たちが成長していく証しだ、というようなイメージが世の中に行き渡っているからでしょう。ところが、聖書が語る「成長」ということは、そのような自分たちの計画による成長、というのとは違うのです。マルコによる福音書4章 27節「夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。」というようにイエス様はたとえ話をされます。ここでの種というのは、私たち人間のたとえでもあるでしょう。その人は成長ということを知らない、というのは現代に照らせばすごいことを言っていると思います。今の世には親が子供を責任を持って成長させ、世の中で活躍できるまでに成長させよう、というような理想的な常識があると思います。そのような理想を持つことが悪いことだとは言えませんが、しかし、このような理想が過度に煮詰まってしまうと、この子は就職できなかったからとか、結婚できなかったから、などと言って嘆き、あたかもその子供の成長が全て親の思い通りになって、親の理想が成就することこそ、その子供の成長だ、といった明らかな誤解へと進展してしまう事もあるかもしれません。

　主なる神の計画は、そのような間口の狭い人間の計画とは比べ物にならない広がりを見っています。「わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか」とイエス様が私たちに約束されている通り、私たちの本国である神の国というのは、人間が思い描く薄っぺらい理想とは違って、はかり知ることが出来ないくらい、その間口も奥行きも広いのであります。

　でも、今の学校教育で、神の国のことを説明しろといわれて、それは人間が知ることができず、計画することも出来ないところですよ、などと言ったら、そのうち相手にされなくなるか、あるいは、人間の手によるテイのいい理想化を語らされるかのどちらかのような気がします。イエス様も神の国を、私たち人間の程度に併せて、様々なたとえ話を用いて、神の国について説明をされています。ここは教会ですから、人間が知ることが出来ず、計画することが出来ないことがむしろ当たり前であり、私たちはそこに不安を感ずる必要はありません。むしろ、神に全てを委ねることとして、それはほめたたえられることでありましょう。

　さてイエス様は神の国はからし種のようなものである。と言われます。イエス様は神の国を、この世で一番小さいものとして見られているからしだねにたとえられるのです。先ほど、神の国は間口も奥行きも広くて、人間がはかり知ることが出来ないくらい広いところだと、申しましたが、そのこともイエス様は次のように言われています。 32節「蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」つまり神の国とは始まりは、この世のどんな者よりも小さいものだが、ついには、この世のどんな者よりも大きく成長するのだとイエス様は言われているのです。神の国が始め小さいということは、ある時イエス様が「神の国は『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」と言われたことに関係があるかもしれません。神の国というのは人と人との間にある、それが二人だけの関係であっても、確かにそこに二人だけの神の国がある、とイエス様は言われています。イエス様はこのように神の国が小さいからと言って、それがだめだとかは決して言われません。神の国はからしだねのようなものである、と言ってイエス様はその小さな神の国を祝福されています。そしてそれが成長して大きな神の国になることもあるとイエス様は言われています。ここで私たちは神の国の成長は、私たち人間の知るところではないということを覚えましょう。神の国の成長は私たち人間が計画することができないゆえに、主イエスは小さな神の国も、大きな神の国にも、等しくその都度、祝福をお与えになられることでしょう。

私たちは、成長という語句に、この世的な見方を知らず知らずのうちに読み込んでいます。聖書の語る成長は、もとのギリシャ語でいうとアナ-バイオーと言いまして、上のほうへ歩みを進めていくという意味であります。詩的に表現すれば、アナバイオーしていくということは、私たちが手を取り合って、天国への階段を一段一段上がっていくという感じになります。実にドラマティックですね。こういう境地にみをおけば、神の国は知りえない、計画できない、ということが、むしろ幸いなこととしてととられられるのではないでしょうか。

アナバイオーしていくということは、衰えを認めているといいますか、受け入れています。日本語で成長といいますと、そこには衰えが含まれず、衰えを認めないところがあるようです。成長の反対語が衰えであるからです。そういった認識も、成長していくという事の間口の狭さを招いているのでありましょう。

牧師の役割というのは、与えられた人たちの、この地上での成長、アナバイオーしていく姿を最後まで見届け、天国での生活へ送り出すことではないでしょうか。私たち人間はこの世での最後の時は意識はなくなり、体は立っておられなくなり衰えますが、それも又私たちが神の国へ向かって成長、アナバイオーしていく一つの姿であります。教会と神の国はなんだかつながっている様でありますが、私たちは、教会が成長していく姿を、単に教会員の数が増えたといったことだけで判断するのではなく、そういった、一人一人の教会員が着実にこの世の生涯を終え、神の国への成長、アナバイオーしていく一歩一歩を始められることを祈りあうということに見出していきたいと願います。

　さて、神の国のイメージがイエス様のたとえ話によって、かなり明らかにされてきたと思いますが、神の国は、私たちが思いもしないような幸せを私たちにもたらしてくれるということです。如何でしょうか、こんなによいことなら、イエス様の大伝道命令「全世界に行って、すべての造られたものに神の国の福音を宣べ伝えなさい。」という命令をされるまでもなく、私たちは喜んで、隣人たちにこのグッド・ニュースを知らせたくなるのではないでしょうか。

　しかし、私たちが福音を宣べ伝えようとするとき、そこに強力な壁が立ちはだかっているということも又事実でありましょう。その壁の一つは、見てきましたように、今の私たち人間が自分たちの理想を追い求めるあまり、自分たちの思いにがんじがらめにされているということでありましょう。そして、はるか昔の実例ですが、古代エジプトの王様であるファラオの姿に私たちは、その丸写しの姿を見出すでしょう。

　今日読まれました、エゼキエル書の箇所は、主なる神が、預言者エゼキエルに託して語らせた、たとえ話であります。しかしイエス様のたとえ話と違うのは聞かせるターゲットがファラオとその軍勢というように定められているということです。悪く言えば、個人攻撃しているということです。ファラオは、他より抜きんでて高くそびえるレバノン杉にたとえられます。この偉大なレバノン杉は、当初、主なる神の祝福を受け、その存在は、すべての鳥たちの巣を作らせ、多くの国民に、木陰を提供しました。レバノン杉は、知らない間によいことをし、他を利する存在でありました。3節から9節までの詩的な文章を読み進めていきますと、レバノン杉はこのように全くよい存在として歌われ始めます。しかし、8節あたりから雲行きが怪しくなって来ます。 8節9節をお読みします。「神の園の杉もこれに及ばず／樅もみの木も、その大枝に比べえず／すずかけの木もその若枝と競いえず／神の園のどの木も美しさを比べえなかった。わたしが、多くの枝で美しく飾ったので／神の園エデンのすべての木もうらやんだ。」次第に、レバノン杉のその偉大な姿は嫉妬の対象になってしまったようです。

レバノン杉は、自分では知らない間にその背丈を伸ばして成長していきました。そしてある時点までは、全ての他の木から感謝され慕われる存在であったのに、その成長していく姿はいつしか、周りが嫉妬し、嫌うものへと代わっていったのです。これは果たしてレバノン杉が招いた罪なのでしょうか。成長していくということが、人知れず、神の業によって成し遂げられるのだったら、レバノン杉が人知れず成長していって、いつしか周りから嫉妬され嫌われる存在へとなってしまった、その罪をレバノン杉に帰するのは酷なことかも知れません。

だが、レバノン杉がその偉大な自分の姿を自覚し、それを誇り始めたのであれば、そこに主なる神はレバノン杉の心のおごり高ぶりを見出し、必要な懲らしめをお与えになられるでしょう。

私たちはこのファラオの成長の実例から学べると思います。私たちが成長していく、アナバイオ―していくということは、実は、私たちがしていることではなくて、その一歩一歩は神のわざと計画によって進められているのです。私たちは自分の成長の道筋を知っているようで知らないのです。ファラオも途中までは主なる神の計画通り成長していたのですが、いつしか自分を誇り始めました。その自我の芽生えを、ファラオはコントロールすることが出来なかったのしょう。

皮肉なことに、ファラオが自分をコントロール出来なくなった時というのは、彼が主なる神の計画を離れた時でもあったでしょう。

私たちは、今主イエスに自分を委ねることが、もっともよいことだと思っていながら、その実、折が悪くなったり都合が悪くなったりすると、主イエスをさておいて、むくむくと自分自身の計画が首をもたげてくるのではないでしょうか。

成長していく、アナバイオーしていくということは、人間の目には衰えにしか映らないこともあるでしょう。その最たることが、この地上生涯の最後の時である死であります。しかし実は、そのようなときにこそ、私たちは主イエスに委ねることが出来るようにされています。まことの成長は、主イエスの御手のうちに成し遂げられるのです。どうか私たちがそのことを信じて、この一週間もその成長の日々を主に祝福され守られて歩んでまいりたいと願います。

祈ります

天にいます

私たちは多くの思い違いによって、この世であなたに喜ばれる成長が出来ないでいます。どうかそのような私たちを憐れみゆるしてください。まことにあなたのみ前で喜ばれる成長が出来ますよう、私たちに勇気と謙遜とをお与えください。

私たちが、見過ごしにしている一つ一つのことをあなたが拾い上げて、私たちの成長のために用いてくださいますように。

今、病と戦っている方々を覚えます。ことに病の為に教会に来られないでいる、福沢八重子さん、平野八郎さん、高瀬輝男さんたちをあなたが顧みてください。それぞれの場所にあって、あなたからの慰めと癒しとが与えられますように。又、私たちが、信仰の交わりを保っていけますよう、私たちを聖霊で満たし、行いへと導いてくださいますように。

まことにあなたのご計画ははかり知ることが出来ませんが、その良きご計画の一つ一つに私たちが目を留めて、驚きと喜びの日々を過ごすことが出来ます様に。体は日々衰えていきますが、私たちの内なる人を、あなたが高くあげ、成長させて下さいますように。

父と聖霊と共に